

瑩山の衆生済度の原点

愛知学院大学 河合泰弘

瑩山（1264-1325）は、曹洞宗の両大本山のひとつ諸嶽山總持寺（現横浜市）の開山であり、永平寺開山の道元（1200-52）とともに「両祖」と称され尊崇される禅匠である。一般的には、道元と比べ瑩山はあまり注目がされていないのが現状であるが、曹洞宗においては殆どの寺院が、瑩山の流れを引いていることを鑑みるに、瑩山派が曹洞宗発展の一翼を担ってきたことは間違いない。したがって、曹洞宗を知るためには道元を理解するだけでは十分ではなく、瑩山についての理解を深めることが不可欠と思われる。

曹洞宗では、永平寺を「修行の本山」、總持寺を「布教の本山」ということがある、これは、それぞれの特徴を表わしたもののだが、そのまま道元と瑩山の特徴に通じるところもある。そこで今回は、瑩山を理解する手掛かりとして、瑩山の特徴の一つされる「女人救済」を中心に、瑩山の「衆生済度」にかかわる考えや態度を明らかにし、さらには衆生済度の発願に至る原点について探っていきたい。

瑩山の著作の中に、まとまった形でこの問題について述べたものは殆ど見出すことはできないが、瑩山の49歳から62歳で遷化するまでの日記を中心に編集された『洞谷記』によって、衆生済度にかかわる考えや、女人済度の願いを知ることができる。『洞谷記』には、いわゆる「ご自伝」と呼ばれる、瑩山が自らの半生を振り返っている段があるが、その中で25歳の時に、観音菩薩のように一切衆生を済度するという誓いを立てている。また、瑩山は、祖母の菩提を弔うために、永光寺の山内に勝蓮峯円通院という観音堂を建立し、そこに母の念持仏である十一面観音像を本尊として祀っている。それを記す「円通院之縁起」には、この観音堂を「悲母弘誓度女之祈祷所」「瑩山弘法利生之祈祷所」と定めており、瑩山の衆生済度の願いが母の意思を受け継ぐものであることが窺われる。

『洞谷記』に登場する主な女性には、母・懐観大姉のほかに、祖母・明智優婆夷、永光寺（石川県羽咋市）の地を寄進した平氏女（後の黙譜祖忍）を挙げることができる。祖母の明智優婆夷については、「永平和尚、建仁寺御座時、御弟子」と言っており、道元との直接の関係が知られ、瑩山の宗教的素養は彼女の影響が少なからずあったと考えられる。また、平氏女こと黙譜祖忍については、瑩山は祖母の明智優婆夷の再来とし、彼女に対する恩を述べる記事が散見でき、これも瑩山の衆生済度の思いに関わりがあるようである。

以上の点を中心とし、主に『洞谷記』の記述を材料として、瑩山の衆生済度の思想とその原点について明らかにしてゆきたいと思う。

キーワード：洞谷記、女人済度、観音